感動と古代史（七）

――福士幸次郎先生に――

今井富士雄

九

毎日僅か二十分間の礼拝であったが、五年間続いたのであるから、若い中学生の自分にとってはやはり重大な意味があったようだ。何かの場合には聖書の中の短かい文句が泛んでくる、大抵はそれを口の中で反芻してはまた呑みこんでしまうことにしているが、時にはその文句と後にある情景を想いうかべては意味を新たに考え直すこともある。結局は信者にはならなかったけれども、むしろキリスト教的考え方は常識として自分の身にそなわっているような気がしないでもない。或はそれだからこそかえって反逆をくわだてるのかも知れない。兎に角ミッションスクールのなかに高橋先生のような仏教的な人が居たことは自分にとって運命的なことであった。そんなところに漂然と教壇にあらわれ我々を文学の世界に誘って呉れた福士先生もまた日本人の魂の根源をたづねる信仰の人と云ってもよい。自分の選ぶ人、敬服する人はいつの場合でも宗教的な信仰をもった人である。それも中学時代の宗教教育のせいかも知れない。

成城高校には阿部六郎先生が居た。先生のことは別に書いたものがある。（成城教育第八号所載「文学と青春」）一昨年亡くなるまで実に色々と教えを受けた有難い先生であった。此の原稿すら書く動機を与えて呉れたのも先生であって、途中で良い読み手を失ったことはまことに残念である。カトリックの篤信者であった母上の影響かと思われる宗教的なものが心の底にあって、時々文学上の問題とからみあっては思いがけない言葉となってあらわれた。ドストエフスキーやニイチエを教えて呉れたのも先生で、その頃夜を徹して「罪と罰」を読んだり、「此の人を見よ」を読んではそれは自分のことだと思ってみたりしたものである。後になって阿部次郎氏の「ツアラトストラ解釈と批評」を読んだとき、この倫理学的解釈よりは弟さんの詩人的解釈がニイチエの真髄をつかんでいると思った。歴史学は勿論として哲学に対してさえ否

定的で、生な文学を至上のものと思っていた。自分自身にも他人にも許さないきびしいところがあって、心の中には汲みつくせない深淵をもった人のように思われた。そこがまた我々には魅力で、しょっちゅうお宅に伺っては勉強の邪魔をしたものである。

京都大学の哲学科に入った時には、此れで歴史学・考古学に対する悪因縁を断ち切った気でいた。色々と専攻学科に就て迷った挙句だったので、かえって新しい分野に踏み入る希望に燃えていた。それに京都という土地は若い者の勉学にはもってこいの所で、吉田神社の黒い参道が小雨に濡れているのをみながら此れから三ケ年間みっしり勉強しようと心で思った時のしみじみとした気持は妙に忘れがたいものがある。

その頃崇敬の的だった西田幾多郎先生は既に停年で教壇を去られ、田辺元先生が所謂純哲の正講座を引き継がれ、哲学史には山内得立・天野貞祐の両先生、宗教学は波多野精一先生、倫理学は和辻哲郎先生、其の他九鬼周三・植田寿蔵・本田義英・小島祐馬・羽溪了諦等の諸先生、西谷啓治・高坂正顕先生等はまだ若手の方に属していた。正に京都哲学の最盛期も過ぎたかと思われる頃であったが、未だ西田哲学の余薫は消えずという具合であって、我々学生等は数回西田先生の講義を聞くことが出来た。四半世紀前のあの時代は、第二次世界戦争もまだ知らず、世間は今とは余程違って世智辛くない、大学生は京都の街では大いに尊重され、貧乏な割合にはよくモテた。就職などは考えなくとも良い、やりたい勉強さえやれば良いものだと思っていた、殊に哲学科の連中はそうであった。あたりの風景と町全体の雰囲気とは故郷を離れて集った青年達にとって正に勉学の為めの理想境とも思われた。

京都に向うときに秘かに心の中で誰れかよい先生を一人でも良いからみつけたいものと思っていた。若しもその人が本当に師と仰ぐべき人ならば、全身をぶっつけてその人の学問を体得し、それを自分の一生の学問にしたいという若者らしい考えを抱いていた。書物を読んでみては著者はどんな人だろうと想像してみたり、自分の将来の学問とのつながりを考えてみたり、勉強そのものよりはむしろそんなことに楽しみを余計もったと云っても良いくらいだったかも知れない。旧臘亡くなられた和辻哲郎先生はもっとも自分を惹きつけた、或る点から見れば丁度我々の年代の者の教養はケーベル・漱石門下の人達によって形成されたと云っても良い。そのうちもっとも幅の広い人は和辻先生であった。行くとして可ならざるはなしのおもむきがあったばかりでなく、着眼は非凡で書かれる文章も読んで楽しい。あらゆるものをやってみたい若い者にとって先生こそは師と仰ぐべき人ではないかと思われたのも無理はない。京都に行くことが決って阿部先生の処へ紹介状を貰いに行った。「次郎兄貴が行けと云うから行ったけれども長く続かなかった。額のこのあたりが白くて冷いような気がする、しかしその奥にはどんなものがかくされているのかなあ、君ならそれを見付けるかも知れない」そんなことをゆっくり云って名刺を呉れた。此の言葉によって自分

ならばとむしろ期待が強められたこともたしかであった。

和辻先生のお宅は疎水ぱたの若王子社の奥に、木立ちにかこまれた高いところにあった。此んな所にも住家があるかと思われるような幽邃の地に、それこそ瀟洒な構えの家であった。紹介の名刺をふところにして、こわごわと玄関に立ったのは夕暮れであった。初め行った玄関から奥の方に廻わるように云われたが、奥の方にも玄関があった。そこでパッと明るい電光の下で奥さんと思われる人のいとも丁寧な御挨拶を受けた、あたりが深山のおもむきがある薄暗がりだったので殊に異様な感じにうたれた。結局何かの御都合でその日はお目にかかれないからまたということであった。名刺の紹介状さえ見て貰えば何んとかなるような書生気分と、生つばを呑みこみながら気負って出かけた自分にとってこの日の訪問は出端なをくじかれたような気がしないでもなかった。とにかく東京で、高校時代の先生方の宅へ無遠慮に伺うのとは大分勝手が違うものであることがこれで分った。家の前まで行って引返したり、行こうと思ったら眼鏡がこわれたからやめたりして、本式の訪問が出来たのは五月も半ばを過ぎてからであった。

多分決められた訪問日だったと思う。既に先客があった。純日本造りの四畳半に通された、数寄屋造りのこったもので細くて丸い柱なども黒く光っているような部屋である。先生は黒っぽい和服、教壇の上の先生とは違って何んとなくくつろいだ様子である。

「成城ですか、此の間一高から来た学生がやって来て、成城から来た学生は疲れているようだと云っていたが疲れていますか」と行きなり聞かれたのでびっくりした、思ってもみないことである。「別にそうは思いませんが、そういう人もあるかも知れません」と答えるより仕方がない。京都大学には全国の高校から集ってきたが成城出身者は変り者が多いとみえてよく目立った。派手に遊ぶ者もたしかに多い、その代り真面目に勉強する者も少しはある、問題をつかんだ者は何年落第しようが意に介しないで頑張っているという具合であった。振幅が広いのか底抜けの規格外れが多いことはたしかである。しかし此れを一概に疲れたとかデカタンと片付けるのはどうかと思う。兎に角一高から来た学生が問題にしたところは面白いし、和辻先生がそれをまともに受けたかどうか分らないが行きなり云い出したのも面白いことである。こんな田舎者も成城には居るのにと腹の中で思ったが、あとは御鋭敏なる観察におまかせすることにした。初めて東京から来る人は京都の気候になか〳〵馴れない、殊に芽出しの頃は急に気温があがって体に悪いからというような御親切なお話が続く、今から考えると自分の受取り方がまちがっていたので本当に疲れていると思ったのであろうか、しかしそうではあるまい。西田先生の本を読むと気持がよくなるというようなことを云ったら、「西田さんの本は分りますか」と聞かれた。此れでまた参った。そう云われるとこちらから何も云えなくなってしまう、そのくせこちらの急所は突かれているのであ

る。本当は気持の良くなるのはどういうわけか、そんな読み方は正しいのかを先生に聞きたかったのだと思う、ところが先生の方から分るかと聞かれてしまうと、こちらは率直な問いも答えも出なくなる。「分ります」と云うのも空々しいような気がするし、「分りません」と云うのもうそみたいである。中谷治宇二郎氏が渡仏の前に和辻先生を訪問して感心したようなことを云っていたのを思い出して、中谷さんを御存じですかと聞いた時には別な中谷さんの名を出された、当の中谷さんとの会談のことは印象が殆んどないらしかった。和辻先生が一高時代の友人で同じ部屋に居た青森の人で工学部に行った人の名前をしきりに思い出そうとつとめられたが遂にその人の名は出て来なかった。

「色々とやってみたいことが沢山ある時に、どれをやれば良いのかその選択のメドはどんな風にしたらよいものでしょうか」いよいよ本題に切り込んで行った。先生ならば自分のやりたいと思っていることをみなやられた人であり、きっと中心を決める為めに悩まれたこともあるに違いないと自分は思い込んでいた。ところが答えは意外であった。「若いうちは色々なことに関心を持つし、それをやれると思うけれども年齢をとると段々そういうものが少なくなって行くものだ」と云われた。それでは自分の求めている答えにはならない。段々とあせるような気になってきた。此のままでは通り一ぺんの教授対新入生の問答である。

「仏像を見ます時に、例えば色んな見方があると思いますが……」その時先生のお顔にチラッと緊張のかげがさしたように思われた。「飽く迄も芸術の対象として見てよいものかそれとも信仰の対象とすべきものかどうか」こういう云い方では本当の問いにもならないしまた答えにもなるまい、そこで「例えば薬師如来などを見ますと……」此れは最後の切り札である。先生が此の仏像をどう見ておられるか、それによって万事がきまるものと思っていた、しかし先生はそれには動じないように思われた。「それはそれぞれの人の見方の違いであって、或人は……、或人は……、どれが正しいとも正しくないとも云えない。それは見る立場が違うのだから」と云う意味のことを云われた。此の答えが与えた失望はおそらく先生には分って貰えなかったものと思う。実は前年見た薬師如来は美と云うにはあまりに恐ろしく、それから宗教美術の取扱いに就て疑問を抱き続けていたのであった。仏像は美の対象としてよりもむしろ宗教的対象として拝むべきものではないのかと思った。そんなことを本気で云えば人に笑われるかも知れない、しかしあの時の感じの分って貰える人にはこの問題も解けるかも知れない、和辻先生にならばあの感じも分って貰えるだろうし、自分にぴったりとした答えを得られるかも知れないと思っていた。先生の仏像に対する根本態度が分った以上これで引き下るより仕方がない。

考えてみればそれまでの自分は書物と人間とを同じものと素朴に信じていた、表現は海面上に浮かんだ氷山に過ぎない、意識といえどもそんなものだ。阿部先生が学問の全べて

を信じないのもそんなことを知っていたからだ。阿部先生はやはり言葉にならない奥の方を見ていたのかも知れない、紹介状を呉れた時の謎めいた言葉はやはり恐ろしい。

「他の仏像はともかく、あれだけは仏様です、拝まなければいけません」若しもそんなに答えて貰ったら私は満足し、且つ驚喜したであろう。そういうあり得ないことを望むほどあの頃は若かった。此の時以来、先生に対する不信が始まった。その代り薬師如来に対するイメージを守り続けることができたのは或は幸いであったとも云える。

薬師寺を訪ねたのは大学に入る一年前の春であった。それ迄は軽い気持で美術行脚ぐらいの心算で仏像を見て行ったのであるが此処で参った。薬師如来を見た時の感銘は今でも鮮かに想いかえすことが出来る。

案内僧は向って右の方の小さなくぐりから私を導き入れた、そこで斜め下から如来の顔を仰ぎ見たとき、此れは大変なものを見てしまった。あの大きな顔は半分は天に向って訴え泣き、半分は地をあわれんで泣いているように思われた。耳には聞えないが太い号泣があたりに響き亘っているように感じられた、それでいて何んともいえないしめやかな感じにさせられるのである。此れは単なる美というものではない、正に大慈大悲とは此の如来を指して云うのであろう。此の仏像に会うて私は初めて宗教の本体にぢかに触れたと思ったのである。

静かに後で考えて見れば色んな情況のせいもあったかも知れない、お堂の中は薄暗かった、顔に当る光線のぐあいが丁度よかったのかも知れない、こちらの心の状態がそうさせたのかも知れない、しかしその後に拝顔の機会があったがやはり最初の印象が変らない。此の仏像は最大傑作だと思う、どこのどんな傑作にも劣らない、そればかりでなくなお自分にとっては特別なものに思えてならない。顔は勿論としてあの黒光りの堂々たる体軀、此れは未成熟の美しさではなく完璧の美である。本尊によく釣合った脇仏も良い、体全体のひねり具合の素晴らしさ、まことにのび〳〵として気持が良い。それにしても薬師如来の顔、仏像としての秘密は顔にある。顔は精神を語るものだからである。希臘の彫刻は素晴らしい、しかし体全体何処にもその美は宿っている。東洋の場合は焦点は顔にある、時には精神性をあらわすの余り体軀は現実ばなれする程ほっそりとすることもある。薬師如来は体全体がよく釣合っていながら顔は尚一段と仏性に輝いている稀れな傑作である。美術論はともかくとして自分は此の仏像にはうたれた。しかも美的対象としてながめる態度は果して仏像に対する冒瀆でないかとさえ疑ったのである。夢殿観音も立派だ、神秘的な荘厳さにうたれた、しかしこの場合はまだ美の領域にはいる。ところが薬師如来には全く圧倒された、此れは美とは云い切れないような気がした。それまでキリスト教の神に於て宗教を考えていた自分に、別個の宗教の世界をのぞかせて呉れた。その時の自分にとっては此の仏像は仏そのものであった。いかに人生は辛かろうともそれを肯定せ

ずにはいられない、それも突っぱなすことによってかえって此方を立ち上らせて呉れるような気がするのである。此の仏像が黙ってあそこに据っているだけで我々は人生に安んじて生きて行けるような気がする、此れは一個の存在である。

丁度その時釈迦誕生会の儀式が行われていた。異様な音楽が奏でられるとともに僧侶達の行列があった。それはどれ程の昔から行われ続けて来たものか分らないが、行列の中には年配の女の人が髷に造花の飾りをつけて加っていた。境内は見物人の雑踏である、しかも薬師如来とは何んのかかわりもない、ましてそれがどんな傑作であろうと知る筈もなさそうである。病人特有のまぶしそうな眼をした白子の青年が私の目にとまった。お堂の太い格子戸の桟の色と対照的である、普段は滅多に外出も出来ないのに今日ばかりはお祭りで出て来たのではないかと思われる、それもかえって此の場の情景にふさわしいような気がする。そう云えば雑踏する大衆全体が私には無縁なもので、古代その儘の状況の中に自分一人が何処からか連れて来られたような気がしないでもない。音楽の奇妙な調子も西域あたりを伝って来たのではないかと思われる、単調な繰返しでありながら単純ではない。行列の中のつぶれたような髷の、下手な着こなしの女人までが昔の貴人をかたどっているような気もして来る。事実は果して古代ではどんなものだったか分らないが、仏像だけ寺院だけがあったわけではなく、それが出来るについては当時の社会が背景にあり、寺院も仏像もはっきりとした機能をもっていたに違いない。そうなると此の見物の為めに雑踏している無心の大衆はかえって昔の儘とも云える、此の仏像を守り続けていたのは彼等であると云えなくもない。美術鑑賞などと懐中電灯を持ち歩るく輩は此の頃出て来た異分子に過ぎない、大体美術的に見ようなどと云うこと自体は昔にはないことだ。作者もまた本当の仏を作る心算で製作したに違いない。作品が本当の仏になった時最も美しいものとなったのだ、美しいものを作ろうとして仏をつくったのではない。此の像が完成した時には作者はきっと救われていたろう。

詩人の吉田一穂氏が高村光太郎氏に会って薬師如来を讃めた時に、あれは最高の傑作であって、初めて仏像を見てそれが分ったのはえらいと感心されたそうである。その時に、どうしてあんなものがあの頃出来たのか分らない、あれは鋳金の技術の方からいっても完璧のものであると云った由、詩人としてよりは彫刻家高村氏の玄人言として聞くべきものと思う。

それにしても作者は一体何者であろうか。歴史学としては仏像文化昂揚の時代的背景を重んずるであろう、美術史学は或は様式的考察によってその謎を解くにとりかかるであろう、それぞれの人がそれぞれの見方をするであろうけれども私にはそんなことよりもそれが仏に見えたそのことが問題である。作者は此の像を作ることによって初めて仏を見ることの出来た者に違いない。それは歴史を超えた永遠につながる問題である。

正直な話、此の仏像を見てからと云うものは色々と考え迷

った。仏像を見たうえでそれを言葉で表現することは一体なんであろうか、例えば美術史の役割は何か、到底此れは言語を以て表現することは不可能ではないか、要するに作品を見るまでの手引きに過ぎないのではないか。或は言語表現は独自の方法で此の仏像をはなれて行われた方がそのものにかえって近いのではないかなどと考えてみた。それよりも此れは美として見るだけでよいものかどうか、此の仏像の精神内容は果してどんなものか、美術の系列に入れてみたらその内容はどんなことになるのか。段々と考えて行くうちに「仏像そのもの」が独立した一個の存在に思えて来た、そうなると色々な見方があってそれぞれ立場が違うのだとは云えなくなってくる。仏像そのものから云えばどういうように見れば正しいのかという問題になってしまった、そこで此の薬師如来そのものにはどういう風に接したらよいかというぎり〳〵の問にならざるを得なくなった、それを和辻先生のところに持ち込んだわけである。

阿部先生が何時か私に云ったことがある、「君は神を見なければ信じない方だろう」と。それはどういうことかと聞いた時、人には何んでも三いろの区別があって、神を見て信ずる人と言葉で信ずる人と、見なくても信ずる人があるようなことを云った。先生はどうですかと聞いたら自分は見ないでも信ずる方だということを低い声で答えたようだった。

その頃見たもののうちでは薬師如来に匹敵するものは夢殿の観音であろう、中宮寺や広隆寺の弥勒よりもすぐれたものだと思う、やはり仏像としては宗教的な神秘性のある方が美術としてもすぐれているように思う。薬師寺の聖観音は少し固い感じがしていたが、先日デパートの出品の際に明るい光線でみたら有難味はなかった、薄暗い厨子の中で見るべきものかも知れない。観心寺の如意輪観音像拝観の時に首に色のついた紐を巻き、口に香木をかみ、手に粉をぬって薄暗いお堂の中の秘仏をこわごわ見た時は、やはり此の密教の秘仏はそうして見るにふさわしいように思った。ただし美術品そのものとしての価値は白鳳のものとは比較にならない。

法隆寺の四天王のうちにも夢殿の観音によく似たものがある、技術的に見れば優劣はないかも知れない、或は作者さえ同じかも知れない、しかし此れを一個の作品として見た場合は全然違った価値のものと云える。作家と作品とは同じものではない、作品は作家といえどもどうにも出来ない運命を担うものだ、それは生れる時にも働くであろうし、出来上ってからでも働いて行く。

蟹満寺の釈迦如来は形式、大きさからいっても薬師如来に匹敵するばかりでなく、美術的価値に於ても或は此の方がすぐれているという人まである。しかし私にはやはり全然異ったものに見える。作者といえどもどうにもならぬ微妙な作用が働くように思われる、そしてその微妙な差異が芸術の世界に於ては大変な差異となる。

漢魏六朝にかけて大陸文化は美術の方からみて素晴らしい、日本よりは先進とも云えるし、造形的にも大きなものや

立派なものが沢山ある。飛鳥・奈良朝にかけて、殊に古い方のものには作品として大陸・半島から将来されたものもあろう、殊に傑作のうちには作者が渡来して作ったものも相当あるだろうと想像される。しかし此の時代は和辻先生も何かに書いておられるように、東洋全体が大きな文化的高揚をしたのであって、その波動の中に日本が巻きこまれたと云える。しかし私にはその波動が逆に大陸にまで及んだとは云わないが、日本も波動の一つの中心をつくっているように思われる。何故ならば此れだけの美術上の傑作が全部将来したものとは勿論思われないし、全部が渡来人の手になるものでもなかろう。結局は此等の相当のものは此の国土から生え出たものだ、薬師如来のようなものは殊にそうだ。

大学を卒業した年の秋、満洲・朝鮮を二ケ月歩るいた。その時有名な南鮮慶州の仏国寺をおとづれた。あの大きな石仏を静かに見ていた時にハッと気がついたことがある。ある角度に来た時につい妙な聯想が泛んだ、ここまで来る途中平壌で見た妓生とその横顔が似ている。当時美人として有名な妓生であったが偶然宴席を同じくしたのでよく観察して眼の中のどこかにしまいこんでいたのだろう、そう思ってみると此の仏像の顔も立派ではあるが何んとなく親しめないものがある、こういうものは微妙な土地の影響があるのではなかろうか。大同・天竜山等の石仏を現地で見た場合どんなものか自分は知らない、しかしそれも注意をしてみればその土地の顔つきをどことなしに持っているのではなかろうか。

和辻先生は白鳳天平の仏像は嬰児の美を純粋に生かし、それを強調し、そこから特殊な美を造り出したものと見ておられる。（日本精神史「仏像の相好に就ての一考察」）しかし此の優れた着眼も生れて間もない嬰児の寝顔を見まもっていた時に気がつかれたことになっている。私をして云わしむればそのモデルとなった多分御自身のお子さんは日本人であるからと云うことになる。

仏像は彫刻の中でも特殊なもので、殊にその顔の大切であることは宗教的な精神の問題と大いに関係がある。飛鳥朝から奈良朝にかけての顔の変化して行く道程はやはり仏教の精神受容の深化につながるものと思われる。白鳳のあたりにその頂点があって、殊に薬師如来に至って極まるのではなかろうか。私には技術的にも最高と云うが精神的にもそれは云えると思う。壬申の乱収った後の充実したある時期の製作であって、天平に至れば美術的には最も円熟しているようであるが内容的には空しいものがあるような気がする。少なくとも此の仏像の作者は人生の色んな苦難を深く知ったものであり、国家的にも政権争奪の劇しい場面を展開した後に此の傑作が生れたのではなかろうか、どちらかと云えば此れ以前のものは仏像それ自身が美しい、しかし此の像に至っては云わば大乗的な美しさである。もろ〳〵の衆上の救済を念願としている、大慈大悲と云うにふさわしい。人生の苦悩を知ること深きがゆえにかえってこんな力強い堂々たる作品にならざるを得なかったのであろう。美をも越えた美である。

焼けない前の法隆寺金堂の壁画は全く素晴らしいものであった、しかし朝鮮旅行の時平壌附近江西の高勾麗王墓内の壁画もまた見事なものであった。土中に覆われていた横穴古墳であるため保存状態は良好であった。折よく撮影の為め逗留していた京城大学の人達は親切に私のため照明をして呉れたばかりでなく、水までかけて鮮かな色彩を見せて呉れた。力強い描線、色彩の配合、むしろ無気味なほどのものであった。此の四神図を描く技倆があれば金堂の壁画を描くのも難事ではないと思われる。構図はどちらも伝統に従ったものであるから問わないとしても、顔となるとどういうものか。あの金堂壁画のあの端整な顔つきは描けるものかどうか分らない。金堂の顔は果して日本のものであるかどうかは問題としても、源流と云われるアジャンター壁画の顔とでは相当のへだたりがある。似ているか似ていないかよりも顔にあらわれる精神内容自体が問題である。まして絵画よりも彫刻は立体的であるために顔に微妙な変化を現わし易い、風土の影響を受け易いし、精神内容も具体化される、形の上の真似では済まされないものがあるように思う。

飛鳥仏には類型的なものが相当ある。類型は必ずしも悪いものではない、むしろその時代の類型のお蔭で見られるものとなっている例は多い、しかし傑作と云われるものはみな類型を破ったものばかりである。傑作はみな独自性をもった唯一のものである。傑作と傑作との距りは甚大である、同じ時代同じ作者の作品といえどもそうである。

白鳳に至って類型は大きく破れた。薬師如来は此の地上に誕生したのだ、此れが出来上った時には作者はきっと此の像を深く礼拝したに違いない。

此の像は孤独である、唯一無二のものであるから。此れこそ本当の仏である。「見て信ぜよ」語るなかれ。

大学では植田寿蔵先生の美学講義が始まっていた、美の純粋性を専ら主張され、物語性の排除を説いていたように思う。

和辻先生の御講義は間柄の倫理学であった。「ニイチエは絶対の孤独を云った、しかし孤独を訴えるのはかえって社会性があるからである。キエルケゴールは孤独であると云った、しかしそれは孤独とは云えない、何故ならば神を呼んだではないか」そんな風のお話であった。悪いけれども私は心の中ではその逆のことを考え続けていた。「社会的であろうとなかろうと孤独は孤独だ、そんなことでは決して孤独はなくなるものではない」と、まことに悪い学生であった。然し先生が例えばギリシャの円形劇場を訪ねた時の話などは面白かった。こっちの端から声を立てるとずーっと向うの方まで声がとどくというようなことをいかにもたのしそうに気取らない自由な態度で語られる時など聞いていても気持よかった。東京大学に移られたのは我々が大学二年生の時で、送別の研究会には別れを惜しむ学生が大勢集った。京都学派からはなやかな色どりが一つ抜けるような気がしたものである。

卒業して十数年目に練馬のお宅に伺ったことがある。私が国務大臣の秘書官をしていたときで、片山内閣でくわだてた

新日本建設国民運動の委員をお願いに行って暫らくお話をした。お宅は田舎家を移したものらしく、どっしりとした線の太い家で京都のお家とはまた違ったおもむきがあった。とにかく何れにしてもありきたりの家ではない。応接した所は広い土間で、角の出窓には厚手縄文土器を飾ってあった。その頃は丁度「登呂」の発掘が騒がれていた時であったが、「唐古」から稲が出て、しかも京大の立派な報告まで出ているのに、どうして大袈裟に騒ぐのかというようなお話があった。その時考古学をやった者として恥かしかったのは唐古から出た木製剣の意味を聞かれて答えに困ったことである。銅鐸文化圏からどうしてあんなものが出てきたかそのわけを聞きたいというのであった。今ならば銅剣類も沢山あったのが銅鐸に鋳直されてしまったのだとつじつまを合わせることも出来ようがその時は参った。然し朱まで塗った此の木製品の本当の意味は今でも分らない。それにしても着眼の非凡なのには流石と感服した。昔私が訪ねたことは勿論御記憶にはなかった。委員の方はあっさりと断わられた。考古学をやるならば京都大学に行けと先生に云われて一高から京都に来た学生があるけれどもと聞いたら、その人は知らないという答えであった。此れは新関良三先生から聞いた話であるが、和辻先生は京都大学の梅原末治先生を大変出来る学者だ、世間には余りよく知られていないがと云ったそうである。考古学の恩師梅原末治先生は実証的な学者の典型とも云うべき人であるからかえって此れは意味が深い、私には両極端の人のように思われるから尚更である。

最後に先生のお姿を見かけたのは成城に来てからである。偶然なことから柳田国男先生のお供をしながら学士院へ行った。会議が始まるまでお相手をしていようと思ってすすめられるまま中へ入ってしまった、此の時久振りに先生のお姿を見た、書類を手に持ちながら急がしそうに歩るき廻っていた。中二階みたいになっている待合室の柳田先生の方を見て簡単に挨拶をされた。すっかり老けていられるので驚いた。「和辻先生でしょう、私達の先生でした」と柳田先生に云ったら、「そうだ、何故挨拶をしないか」と不思議そうに云われた、悪いと思ったがそのまま黙っていた。若し此処で挨拶をしても先生には恐らく何んの感じもないであろう、昔の話をしてもとっくに忘れているに違いない。そんなことを柳田先生に説明してもはじまらないことである。それよりも和辻先生は私にとっては書物の上の先生である、会ってお話を聞く先生ではない、何時の間にか自分の心の奥にはそんなかたくなな成心が出来てしまっていた。

旧臘亡くなられたことを知って私は「倫理学」三冊を改めて静かに読み直した、そして豊富な学殖と柔軟な感性に改めて敬服した。先生の学問はあまりに多方面に亘っているので我々には究めつくすことの出来ない一大叢林のようなものだ、今後学問するに当っては学ぶべき点が実に多い、しかしまた先生の学問そのものが我が国の風土の上に育ったものであることもまた確かである。（未完）